A CASE OF MAXILLARY CANCER IN A TWELVE YEAR OLD BOY

By

Prof. T. GOTO. AND J. MURASHIMA

*From the Department of Oto Rhinology
(Prof. T. Goto) University of Nagasaki, School of Medicine*

A Case of maxillary cancer in a twelve-year-old boy was reported.

Histological examination revealed a basal cell carcinoma. ray irradiation, totally 3150r, was given preoperatively and radical redical resection of the maxillary bone and radical neck dissection were carried out under endotracheal anesthesia. The postoperative course had been smooth and 2 years after the operation, no recurrence was seen.

Maxillary cancer in children under twenty years of age is very rare. In this age group only 6 cases have been reported in Japan and among 1011 cases of maxillary cancers collected from the literatures only 3 were under twenty years of age. The prognosis of these cases in general is poor.

12 才 の 上 顎 癌

長崎大学医学部耳鼻咽喉科教室

教授 後 藤 敏 郎・村 島 二 郎
ゴ トウ トシ ロウ ムラ シマ ジ ロウ

上顎癌は50才代にも最も多く見られるのであるが、近時癌腫の診断の上に若年者に発生する癌腫が注目されるに至った。上顎癌もまた比較的若年者に見られることも既に知られてはいるが、最近、12才の上顎癌症例に遭遇した。年令的には文献の上では極めて稀であつたが、気管内麻酔下に上顎の全摘術を行つて2年後なお再発をみないので報告し併せて若年者の上顎癌に就て考察することにした。

症例：12才の男子。初診昭和31年11月12日。約10カ月前に左頬部に軽度腫脹を認め歯科医より頬歯肉皺壁に試験的に切開を受け上顎内埋伏歯によるものと診断された。その後頬部の腫脹は漸次し、頬歯肉皺壁に加えられた切開創も瘻孔を形成するに至つて当科に紹介された。左頬は隔壁性に腫脹し、硬度は弾性硬で、圧痛を欠ぐ、頬歯肉皺壁に小瘻孔ありて粘液性分泌が少量認められる。消息すると骨を欠損し、肉芽よう組織にふれる。洞腔は認められない。鼻腔近見は腫瘍は認めず中鼻道に粘液膿性鼻漏中等量を認める。後鼻鏡的にも腫瘍が見られない。腫瘍の疑いで試験的に上顎洞を開放すると犬歯窩には骨莖を欠ぎ上顎洞内に向つて腫瘍よう組織で充満されていた。レ線検査の結果その腫脹は深部後方又

は篩骨蜂巢の方への進展はなく寧ろ外部に向つて増殖しているように見られた。

病理組織像（別紙写真）：大小の核を有する上皮性の細胞が多数の癌巢を形成しているが、癌巢の中心部の細胞は少しく丸味を帯びており、これ等の細胞はChromatinに富んでいる。有棘細胞は認められず角化の傾向なく基底細胞癌と診断された。

放射線照射後に手術を行うことにした。

術前頬部及び左側頸部から45日間にX線3150r（表面量）照射を行つた。照射後4日目に気管内麻酔下に頸部リンパ廓清術に続き上顎全摘術を実施した。

手術所見：篩骨蜂巢、眼窩、頭蓋底の方向には浸潤は見られず、上顎骨は全体として厚い結合織にて囲繞されていたために一つの塊として切除摘出できた。翼口蓋窩にも浸潤は見られず頭蓋との間は結合織の被膜化のためによく分離された。硬口蓋の部で正中線を多少越えて反対側の口蓋板の骨髓が線維性に變化して見られたので、この部は念のために広く鑿除しラジウム針を挿入しておいた。

考 按

上顎癌の発生の年令的關係を文献及び教室の統計から

術 前

術 後 (2年後)

摘出上顎骨

基底細胞癌癌巣

若年者上顎癌年令別統計

報告者	年 令 (才)			上顎癌 総数
	0-9	10-19	20-29	
龍 野		1	55	
広 戸 (京都大)		5	137	
山 川 (大阪大)		1	160	1933~1942
小 林 (徳大)	1	2	147	1946.9~1951.11
原 (米 国)		1	92	1935~1954
岩本・平岡(沢大)	3	8	294	1936~1955
竹中 (京府大)		2	62	1945~1955
後藤・村島(徳大)	1	2	64	1949~1958.3
	1	4	22	1011

調査すると別表の如く、上顎癌症例総数 1011 例のうちで最も多数を占める年令は 50 才代で 31.2% である。若年者には少く 29 才までのものは 27 例 (2.6%) に見られるが、10 才代のものには 4 例 0.4% 認められている。

若年者の上顎癌の症例のみを文献に求めると、鳥居氏例 15 才♀、腺癌。久保(猪)氏例 18 才、♂。öhgren 例 25 才♀、扁平上皮癌。A.Kalis 例 13 才♀、円柱上皮細胞性腺癌。J. Mc MAHON 例 20 才♀、扁平上皮癌。岩本氏例 16 才♂、及び 17 才♀、17 才♂の 3 例。他に小林氏の満 2 年 9 カ月の 幼女の単純癌と De Vincentis (Perugia) の 2 才幼女の硬性癌の報告例が見られるのみである。

癌腫の早期診断が絶対重要視されている今日、僅少なから斯る若年者にも上顎癌が発生し得る事は診断ひいては治療上一考を要する。

本症例の術後経過： 本症例は前述の如く術前 X 線照射を行い、頸部リン節廓清、上顎全摘術を実施し、術創部にラヂウム照射を追加したのであるが、本症例は癌浸

潤が外来部に限局増殖し手術により全摘出し得たためか、本症例は幸い手術も円滑に施行でき術後2カ年を経過した現在再発を見ない(別紙写真)。

若年者に起つた上顎癌は文献では予後極めて不良でいづれも短日月の間に不幸な転帰をとつているが、その意味において本症例は貴重な経験と云い得る。

文献をみても観血的療法を実施した例は甚だ少く、S. A. Kalis (Russisch) が1951年に13才♀円柱上皮細胞性腺癌に摘出術を実施し、J. Mc MAHON が1955年に20才♂扁平上皮癌に上顎内容除去を反復施行している。本邦では岩本氏が17才♂例に上顎全摘術を実施した報告が記載されている。このうち J. Mc MAHON 及び岩本氏の例は術後約5カ月で不良な転帰をとつているが、S. A. Kalis の例は術後8カ月の観察では再発を認めないと記述されているがその後のことはわからない。本症例では術後2カ年経過の現在再発が認められないが、その理由を考えると、癌の性質が腺癌であつたことが大きいと考えざるを得ない。上顎の腺癌は発育緩慢で転移の傾向が少く、expansiv に良性腫瘍よりの増殖の仕方をする事が知られている。本例も結合組織による被覆化がつよく、これにレ線の照射を行つたために更にその傾向を増加し、手術時によく被覆化された塊として全体的に取り出すことができた。いづれにしても頸部廓清手術について上顎切除術が危険なく行われることのできたのは気管内麻酔によることができたためである。

結 語

12才男子の上顎癌(基底細胞癌)例を報告した。術前X線照射3150rを行ひ4日後に気管内麻酔下で頸部

リンパ節廓清術及び上顎の全摘術を実施した。術後2カ年を経過して再発を認めない。

文 献

- 1) 土井博: 我教室最近10カ年間に於ける鼻腔及び副鼻腔腫瘍の統計的観察, 日耳鼻会報, 49: 508 (1943).
- 2) 山本宗路: 上顎癌の臨床的観察特に予後との関係, 日耳鼻会報, 49: 1019 (1943).
- 3) *McMahon, B.J.*: Carcinoma of the maxillary sinus in a youth of twenty Ann. Otol. Rhin. Laryng. 64: 777 (1955).
- 4) 原初治: 鼻及び副鼻腔の悪性腫瘍, 耳鼻咽喉科, 27: 351 (1955).
- 5) 竹中文一郎, 岡本栄之助, 横田和夫: 鼻腔及び副鼻腔悪性腫瘍に関する統計的観察, 耳鼻咽喉科臨床, 48: 239 (1955).
- 6) 小林秀夫: 上顎癌に関する臨床的考察, 慈恵医大, 耳鼻咽喉科教室開講六十周年記念論文集, 333頁(1953).
- 7) 岩本彦之丞, 平岡尙三: 九州大学耳鼻咽喉科教室最近20年間に於ける若年者癌腫の統計的観察, 耳鼻と臨床, 3: 107 (1956).
- 8) *Kenneth D. Devine*: Tumor of the Nose and Throat A.M.A. Arch. Otolaryng. 67: 716 (1958).
- 9) *De Vincentis*: Carcinom des Siebbein und oberkiefers bei 2 jährigen kind. Zentralblatt für Hals-Nasen und Ohrenheilkunde 57: 59 (1957).
- 10) *S.A. Kalis*: Ein Fall von Oberkieferkrebs bei einem Mädchen von 13 Jahren. Zentralblatt für Hals-Nasen und Ohrenheilkunde 45: 259 (1952).

(原稿到着=昭和34.2.4日)